

第1回「多文化共生まちづくり会議」

議事要旨

日 時 令和8年6月30日（火） 19:00～20:50

場 所 タワーホール船堀 3階 産業振興センター

出席者 委員

菊池 哲佳 (明星大学 人文学部 国際コミュニケーション学科 准教授)

中村 徹 (小松川平井地区連合町会長)

新居 みどり (特定非営利活動法人 国際活動市民中心

C I N G A コーディネーター)

澤田 陽子 (小岩駅前町会長)

トータ サイスリーダー (清新プラザ自治会 役員)

鳥屋部 岳治 (王子マテリア株式会社 江戸川工場 事務部 部長)

篠原 克彦 (学校法人 滋慶学園 東洋言語学院 事務局長)

門田 信雄 (江戸川日本語ボランティア連絡会 代表)

辛 冠橋 (中国) (公募外国人区民)

劉 鋼 (中国) (公募外国人区民)

トーマス ビヌー (インド) (公募外国人区民)

グエン ティエン シー (ベトナム)

(公募外国人区民)

リザル ラジャン (ネパール)

(公募外国人区民)

宋 美永 (韓国) (公募外国人区民)

事務局

S D G s 推進部とともに生きるまち推進課

傍聴者数 7名

議事要旨

1 開会

(当会議の背景及び目的について)

- 本区の外国人人口は令和8年6月1日時点で54,527人。
- 外国籍の方は、今後増えていくことが見込まれる中、地域の担い手としての役割を期待する一方で文化の違いや言葉の壁などの様々な課題を抱えている。
- 本区の目指す「ともに生きるまち」・「多文化共生のまち」の実現に向けて、委員の皆さまのそれぞれの立場から意見をいただき、解決策を一緒に考えていきたい。

2 会長及び副会長の選任

- 明星大学人文学部国際コミュニケーション学科准教授の菊池哲佳氏が会長に選出された。
- 小松川平井地区連合町会長の中村徹氏が副会長に指名された。

3 自己紹介

- 各委員より自己紹介を行った。

【本会議についての説明】

- 本会議は原則公開とし、傍聴を認め、あわせて議事録については、事務局で作成し、後日、区ホームページに掲載することに決定した。

4 議事

(1) 事務局説明

- 資料3「事務局説明資料」に沿って、江戸川区の在住外国人の状況等について説明した。

(2) 意見交換

「江戸川区に暮らして感じていること」について、意見交換を行った。

(主な意見の内容)

〈委員A〉

- ・日本に来了た21年前からずっと江戸川区に住んでいる。江戸川区が第二の実家のようになっている。
- ・江戸川区は下町の風情があつて昔から住んでいる方も多い。外国出身の方たちが増えてきて、不安に思っている住民が多くいるのではと感じている。
- ・江戸川区だけではなく、人が暮らすうえでは、ルールとマナーを守れば良いと思っている。
- ・インターナショナルスクールを経営しているうえで、子どもたちがまち中で騒いでしまうことがある。その時に近所の方が、指導したほうが良いのではと親切に言いに来てくれることがある。そのことを前向きに受け取って、子どもたちに指導をしている。
- ・このように小さなことでお互いを気にして意見を言い合える関係であれば、より良いまちになるのではと感じている。

〈委員B〉

- ・ホームページは英語に翻訳されるが、区役所に行っても、込み入った手続きが必要になった場合の資料や書類、区役所から送られてくる通知は、日本語であることが多い。
- ・日本の学校は日本語でしか教えていないため、ついていけない。インターナショナルスクールに通おうと思っても学費が高額で通えない。この中間はないのかと感じる。子どもたちに十分な教育を受けさせるため、日本に貢献できる人材であっても教育環境の問題で、英語圏のオーストラリアやシンガポールに移動してしまう。

〈委員C〉

- ・2003年に中国へ赴任した際に、意外にも日本語や韓国語が広く通じることに驚いた。
- ・かつて日本で働き、留学した中国の方が多く、帰国後も日本人に対して日本語を使用している。
- ・江戸川区で暮らしている外国の方々が、国に帰った時にその時に得た経験や言葉を、日本の企

業や日本人に提供することができる。

- ・その時の経験が良いものであれば、日本人に対してなにかしてあげたいという気持ちが生まれる。

- ・自分が中国に行って中国の方に親切にしてもらったように、双方向での思いが生まれることで、暮らしやすいただけではなく、次の世代にもつながっていくと感じている。

<委員D>

- ・日本語学校に入学する学生は、約 20 年前までは、東アジアの学生で特に中国の学生が多かったが、現在はネパールの学生が最も多く、ベトナム、ミャンマー、バングラデシュ、スリランカの国々が続いている。

- ・中国の学生は現在でも多く在籍しているが、お金に困っていない学生が多い。一方で心が弱くなってしまうことがあり、学校が一人一人に寄り添って、地域と連携しながら支えていくということが必要と感じている。

- ・中国の学生は、大学卒業後、日本に 3 割程しか残らず 7 割は国に帰ってしまう。日本での留学経験が良いものであれば、将来また留学に来るサイクルがつながっていく。

- ・来年の 4 月から技能実習に代わり育成就労という新しいビザができる。特定技能 1 号 2 号と含めて、政府は 2028 年度末までに約 123 万人の入国を見込んでいる。

- ・江戸川区は、ベッドタウンであり静かに住む場所。今後もっと外国人が急増する可能性がある。ここで大事になるのは、秩序ある共生社会ができるかということ。

- ・そのためには、ルールづくりやルールを守れるようにすることが大事。これは外国人だけでなく、受け入れ側の日本人にもルールを守れるような地域にしていく必要がある。

- ・悪意なくルールを破ってしまう外国人もいると思う。日本の中の文化をしっかりと理解してもらって、それをルールとしてわかりやすく伝える。

- ・ルール、秩序をしっかりと遵守していけるような地域にしていくことが、共生の第一歩だと感じている。

<委員E>

- ・先ほどの事務局説明（資料 3 10 ページ）で江戸川区の外国人人口が、当時の推計よりも大幅に上回っている。事務局として、どう評価しているのか。

- ・例えば、外国人に対する日本語教育も成り行きでやるのではなく、しっかりと推計を立ててやっていく必要がある。現状、日本語教育施策に遅れがあると感じている。

⇒外国人人口の増加については、国の入管政策に大きく左右されるもの。外国人人口が増えている現実を受け止めて、自治体としてできることを取り組んでいきたい。その一つが多文化共生だと考えている。日本語教育施策がニーズに追いついていないことは、承知している。本区でも「えどがわ日本語クラス」を始めたが、まだ対象人数も限られている。次回の会議で「日本語教育」もテーマにさせていただき、議論を深めていきたい。（事務局）

<委員F>

- ・このような会議体は、一人だけ外国籍の方がいてあとは全員日本人ということが多い中、外国籍と日本人の構成員が同じようになっている。

- ・様々な国の方々がいらっしゃるが、ここは日本なので、共通語の日本語で議論をしていくことが大事だと思っている。

・江戸川区がみんなにとって住みやすくなるためには、日本人でも外国籍でも江戸川区民として生きていくということなので、日本語教育や日本人側の変容や外国籍の方々の理解やルールを守ることも必要。

・まちづくりにおいても、日本語が共通言語であるということを考えると、ふりがなを振ることやデジタル化を進める等の合理的配慮も、皆さんが安全安心に暮らすうえで必要と感じている。

・このように未来方向で議論することが非常に大事になっていく。そうしないと新しいものは生まれないし、これこそが多様性の力だと思っている。

5 その他

●特になし。

6 閉会

〈文責：事務局〉